

勝林寺寺報

安楽園をねがうひと
正定聚にこそ住すなれ
邪定・不定聚くになし
諸仏讃嘆したまえり。



このご和讃は『讃阿彌陀仏偈和讃』四十八首のなかの一首です。もと親鸞さまの『讃阿彌陀仏偈』という漢文の偈(うた)を日本のことばにおおしてうたわれたものです。

ですから当然、『偈』にうたわれていることが、そのままそっくり『和讃』されていなければならぬはずで、

ところが、いま、ことばの表面から二つをくらべてみますと、大きな違いのあることがわかります。

親鸞さまの『偈』では「ほんとによくつとめて、その結果、安楽園(阿彌陀さまのお浄土)に生れたならば、お浄土の徳として、そこに生れた者は、みなやがて必ずほとけになるに違いない仲間になれるのだ」という文です。

ところが親鸞さまのこの『和讃』では、「まだお浄土以外の世界(法界)にいるものでも、願生安楽園、一心に安楽園に生きようと信じ願うものは、身はこの世にありながら(現生)、必ずお浄土に生れて阿彌陀様と同じ仏に成るくらいに入り住す身に定まるのだ」となっています。

このことばのうえの違いはいつたいどうしたことなのでしょう。

正定聚(ほとけ様の仲間入)が、死後お浄土へ行つてから出来るのか、この世の身に得させていたことが出来るのか、これはまさに大問題です。

そして、「現生正定聚」(信心にめざめたその一瞬に、身は現生にありながら、如来さまのいのちの中に生れかわり仏の仲間入りをする)ということが、他宗と浄土真宗の別れ目だとしてみれば、もう少し立ち入って親鸞さまのおころに聞いてみなくてはなりません。

(次号へつづく)

報恩講とは

これから年末にかけて、浄土真宗の寺ならどこでも「報恩講」が勤まります。そのうち続いて浄土真宗のご門徒ならどこでも「ほんごさん」をおつとめしない家はありません。

「報恩講」

「本願を信じ念仏申して凡夫がほとけになる」真実の教え「お念仏の道」を初めてお聞きくださった親鸞聖人の

お徳をしのぶなかで、大切なことは、私達一人一人のご信心一いのちのあり方を、互に寄り合い語り合つて、たゞし合い欲ひ合おうではないかとおつとめする寄り合いを「報恩講」とよぶのです。

親鸞さまが亡くなつてわずか三十年しか立つていないのに、世の中にはいろいろ間違つたことが行なわれ始めておりました。たとえば「名帳」といつて念仏者仲間の系図か名簿のなかに自分の名前を書き入れてもらつたら、それで

往生が決まるのだとか、やつぱり死に際の名前で「おん」に「あずかるのだとか、とんでもない間違いが横行し始めていたのです。本願寺第三代の覚如上人は「これは大変なこと。親鸞さまの教えは決して、お念仏称えたら臨終に救われるというようなものではない。いつでも、どこでも、だれでも、お念仏にこめられてある如来さまの親心こそ本願によびさまされたその一瞬のめざま「ご信心」のちどころに、私は如来さまのいのちのなかに生れかわり、往生治定。」このことを踏みはずしては

本堂の

畳の間は

なぜ広い

奈良や京都の有名な観光寺院の本堂と、浄土真宗の寺の本堂を見くらべたことがありますが、お飾りの仕方や仏具など細かい点はともかく、だれでもはつきりその違いがわかるのは、内陣(仏様を安置する一段高い板の間)と外陣(参拝者のすわる広い畳の間)の広さの違いです。浄土真宗の寺では、内陣にくらべ、このほか外陣が広くなっています。その理由は、ひとこと言くと、一人でも沢山の人がお参りしやすいようにしてあるからです。

浄土真宗の寺の歴史をふりかえつてみますと親鸞さまのおひろめ下さつたお念仏のみ教えを共々に聞くための「道場」から出発しているものがほとんどです。つまり、聞法のための集会所が、のちに寺という形に発展していったのです。

だからこそ、一人でも多くの人を収容しうる集会所たる畳の間が広くとつてあるという、浄土真宗ならではの伝統が今日の寺の本堂にもつたえられてきているのです。

ですから、真宗寺院の本堂の大きさは、それぞれの参拝者の数を考へて決められたのです。巨大な本尊などを安置するのに見合うため設計されてある有名観光寺院の本堂とは、根本的に違つておられます。

一人でも多くのお参りを願つて、この本堂を建ててくださった、祖先先輩のおもいを、もう一度考えさせてもらいたいものです。

浄土真宗ではない。だからこゝを踏みはずさないよう、お互が、親鸞さまのご命日(旧十一月二十八日)をご縁として、正しい教えを今一度仰ぎなおし、互の信心をたゞし合おうではないかと始められたのがこの「報恩講」です。

死にさま・死に際の際の気になる私たち。「報恩講」に今年もお出会いして、そのところをしつかりと語り合い聞きなおそうではありませんか。

勝林寺では次のようにつとめます。

- 十一月 夜七時
- 二十一日 昼十一時



列年通りマイク robes が運行します。

十一月のこよみ

- 一日 教団弘道氏宅法事、出石町文化祭
- 二日 宮嶋幸彦氏宅法事
- 三日 四州教区御巡教随行講師
- 四日 光顕寺報恩講
- 五日 光顕寺報恩講
- 六日 光顕寺報恩講
- 七日 光顕寺報恩講
- 八日 光顕寺報恩講
- 九日 本山伝道院布教実習指導講師
- 十日 同
- 十四日 山田ちる氏宅法事
- 十五日 出石組「法輪会」聞法会 ★
- 十六日 福成寺報恩講
- 十七日 福成寺報恩講
- 十八日 兵庫教区同朋運動対座委員会
- 十九日 おみがき奉仕 ★
- 二十日 高福寺報恩講
- 二十一日 高福寺報恩講
- 二十二日 勝林寺報恩講 ★
- 二十三日 勝林寺報恩講
- 二十四日 正福寺報恩講
- 二十五日 「みのを聞く会」定例
- 二十六日 玉井克弥氏宅法事
- 二十七日 勝百保平氏年回
- 二十八日 出石組住職寺族同朋講座(勝林寺)
- 二十九日

おみがき奉仕へ

例年のように、「報恩講」を前に仏社・仏婦で「おみがき奉仕」をさせていただきます。十一月十八日夜七時からです。お願い致します。

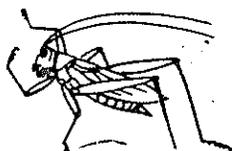
仏社・仏婦会長より

「法輪会」聞法会ひらく

出石組「法輪会」(組の連研修了者の会)の聞法会が次のように開かれます。会員の皆様、お繰り合せご参加下さい。

- 日時 十一月十四日(土)午後一時より
- 会場 西宗寺(鳥)門徒会館
- 講演 「めざめる教え」

教区相談員 富永 真哉先生



お数珠



ほとけ様を礼拝するとき、手にお数珠をかける。あのお数珠、いつのころから使われ始めたのでしょうか。

どうやら、お釈迦さまのおられた時代には、ご挨拶のときに用いるものとしては、使われていなかったようです。

これはもともと、インドの古い民族宗教ヒンズーの神様、シバの神とか梵天さま・弁天さまなどが身につけている装身具、ネックレスやブレスレットのようなものが、いつからとなく仏教に取り入れられ、やがてそれが、修行のとき時を計ったり数を計算する道具として使われるようになったもの。それがだんだん形式化していつて、礼拝のときに手にかける今のお数珠になったものと思われる。

親鸞さまはいつも手にお数珠をお持ちでありました。

いまに残る親鸞さまのどの肖像画をみてもそれがわかります。また、今もご本山の御影堂に安置してある親鸞さまのお木像にも、現に長いお数珠がかけられています。

親鸞さまのお持ちのお数珠は、大小さまざまな珠がつけられてあると申します。いろいろな種類の玉がつけられていて、いろいろな親鸞さまは恐らく、大小いろいろな珠のつらねられている数珠に、如来さまのご本願を思われていたにちがいありません。

大きな者も小さな者も、どんな時代に生きている者もどこで生きている者も、「設我得仏、十方衆生」。

どのだれでも、みんなほとけにしなればば私自身もほとけと呼ばれませんかという、大きな願いによつて願われ結ばれ連れられているのだ。親鸞さまはお数珠をいつも手にかけて、それをおして、如来さまのご本願につらぬかれてある衆生！私たちが共々を、およろこびになつたものだと思います。(勝林寺テレホン法話)

葬儀
十月二十六日
平田 専福寺坊守
姑射 栄子 様



お釈迦さまの生涯

その当時インドの各地には「拜火教」などという邪教が大きな教団をもつてはびこつておりました。

お釈迦さまは、それら教団の指導者に、真実の因縁の法を説いてその誤りをたゞされました。

千人もの拜火教徒を弟子にされたお釈迦さまは伝道の旅を続けて、やがて懐かしい王舎城へと向われました。その途中ガイヤ市郊外にある「象頭山」にお登りになりました。すでに日は暮れ、闇の中に、町の燈がはるかにまたたき、夜空をうすあかく染めています。そのとき釈尊はお説きになりました。

「見よ、すべてのものは燃えている。目は燃え耳は燃え舌は燃え物は燃え、こころも燃えている。いつたい何によつて燃えているのであるか。欲の火・怒りの火・おろかさの火によつて燃え生老病死、うれい・悲しみ・もだえの火によつて燃えて

葬儀

十月二十五日

日高町たじま荘

稲葉 芳太郎 様

いるのだ。この毒の火を吹き消すことによつてあなたたちは、輪廻の苦しみから永遠に解脱(げだつ・ニルバーナ)することができるようです。」
このように、お祈りやまじないによるのではなく、苦悩の原因を正しく見つけそれを克服していく道を示されたお釈迦さまは、やがて沢山のお弟子と共に、何年ぶりかで故郷カピラ城へ帰り父浄飯王・義母ヤシヨダラーとも再会されました。そのある日、お釈迦さまが王宮に行かれようとしてみると、まだ七人になったばかりの実子ラーフラ(らごら)が出てきて
「おとうさま、私にあなたの遺産をください」と申しました。

お釈迦さまは、手に持つておられた鉢鉢用の鉄の鉢を、だまつておわたしになると、そのまま王宮へ出かけられて行きました。

なんのこともやらわからぬまま、ラーフラはおとう様のあとをおいかけて行きました。
そのラーフラを、お釈迦さまは、静かな森のなかに導き入れ、そこで頭髪をそり落して、出家者(道を求める人)にしてしまわれました。
釈尊が、わが子にのこす、三千世界でいちばん大切な「遺産」とは何だったのでしょうか。

それは
「この毒の火を吹き消して、輪廻の苦しみから永遠に解脱(げだつ)する法」を実践すること以外にはなかつたのです。
(豊原大成先生「釈尊の生涯」)

座布団カバー
一〇〇枚寄贈

大阪住吉在住の

坂本 たか様が

本堂用座布団のカバー

一〇〇枚を

秋のお彼岸に

お参りされた折に

寄贈くださいました。



出石そば

本陣 (中央店)

十一月五日開店



勝林寺門徒の中川信氏(かじや)が八木通大手門前に蔵持「本陣」の支店を開業されます。土産物店の二階が「出石手打ちそば」の店です。

カリツとしたじやがいもの歯ごたえを残してゆでるのがコツ。油の入つたマリネタイプ。

(材料) 三〜四人分

じやがいも四個、ねぎ二本、漬け汁(酢1カップ強、赤ワイン1カップ、サラダ油半カップ、砂糖大さじ4、塩小さじ2、こししょう少々。) ロリーエ1〜2枚。

(作り方)

1. じやがいもは皮をむき5センチ厚さの拍子木切りにし、堅めにゆでて水けを切る。
2. ねぎは3〜4センチ長さのぶつ切りにして、ゆでて水を切る。
3. 漬け汁の調味料を合わせる。
4. 保存ビンなどにじやがいも、ねぎ、ロリーエを入れ、漬け汁を注いで1日〜1日半漬ける。

じやがいもと

ねぎの

ワインづけ

